

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

世界経済の最新の見通しを経済協力開発機構(OECD)が3月31日発表、経済予測(エコノミック・アウトLOOK)で見ると、世界の先進国経済について初めて二年連続のマイナス成長を予測、日本経済新聞の記事によると、世界銀行も同日付で2009年の世界全体の実質成長率がマイナス1.7%になると予測している。

世界全体では、経済協力開発機構がマイナス2.7%とさらにきびしい数字をあげ予測している。

その中で、我が国はマイナス6.6%で、アメリカのマイナス4.0%、ユーロ圏のマイナス4.1%、ロシアのマイナス5.6%をこえ、主要国の中で最悪の見通しとなっている。

このような実質成長率の予測に対し、失業率の増大悪化はさけて通れない、不況の長期化で2010年の主要先進7カ国(G7)の失業者数は2千600万人に急増すると予想、失業率は日本5.6%、アメリカ10.3%、ユーロ圏11.7%で大幅に悪化、景気後退を予測している現実を考え、何がその要因なのか、それぞれの国々の実情に照らして考察する必要がある。

そこで、我が国の実情を考察して見ると、高齢化社会であり少子化社会と重なり労働コストの上昇による国際競争力の低下、産業の空洞化、国際化にともなう国境のないボーダレスワールドの時代となり新興国の追い上げ、輸出に依存する産業構造では、この様な経済のグローバル化の時代に成長と繁栄の維持は従業員の協力なくしては不可能だと考えられる。

全世界的な需要の収縮は、非正規社員のくびきりから、正社員の希望退職者の募集、人員整理、倒産そし

て工場閉鎖へとつながっていくと考察される。

ここで考えることは、国内需要の拡大をはかり低成長時代への突入だと頭を切りかえることである。

人員整理の前に、誰でも納得する人材の適材適所での登用を行う。本当に過剰人員なのか？他部内への転用は？新規分野開拓への転用活用は？等について考える必要がある。

雇用の不安定な関係は、会社に対する従業員の忠誠心を失い、信頼し協力する心を失うことになる。

会社に対する忠誠心は、厳しく辛く、しんどい仕事を一緒にやり通し、苦労を共にして共感の絆ができるのである。会社への帰属意識を共有するために寒山の「生年不満百、常懐千載憂」を学び「行雲流水」、「菩提心」の教えを学び知り、最初にくびきりありきの人員整理、解雇の経営方針はさけて通りたいものであると思考する。

2. 寒山拾得に学ぶ

縁があって、中国蘇州寒山寺での禅画作品展で寒山拾得画の掛軸を出展し、釈性空寒山寺法主大和尚賞をいただいた。現在、寒山寺禅画芸術師の荣誉ある称号をいただき、寒山拾得画を学び書き続けている。

寒山拾得画といえば、寒山は経巻を拓き、拾得は箒きを持つ図様が多く、飄逸な姿を組みあわせた禅画を目にした方々が大勢いると思われる。

今回、蘇州寒山寺より寒山寺境内に建つ唐代の詩人張継作の「楓橋夜泊詩」の石碑と「寒山拾得像」の石碑の模刻二柱を日本禅画家協会(会長平岡白堂)が賜り、臨済宗鎌倉五山筆頭の本山建長寺の境内に建立された。是非共、多くの方々が参詣、見学されることを期待したい。

そこで、寒山拾得とは如何なる人物なのか、その教えとはどんなものなのか述べることにする。

寒山は、中国唐代(618~907)の人で生没不詳であるが常に天台始豊県の西70里の寒巖幽窟中に幽棲したので寒山といわれていた。

一見狂人に類似した奇行、行動が多く、常に国清寺に来て拾得と共に衆僧の残飯などを拾ひ集めて竹筒に詰めて、二人携へて寒巖に帰るを常としていた。

しかし、狂態を演ずる中に言辞のみはすこぶる仏理に叶い、その詩は巧みであった。世に寒山を文殊菩薩の化身といい、拾得を普賢菩薩の化身といい、国清寺の豊干と共に三聖と呼ばれていた。

釈迦如来の脇侍(菩薩の上首、上座をさす)が文殊菩薩と普賢菩薩であることを考えると非常に高い評価をうけていたことがうかがえる。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
(野風生)
雅号 樹泉